

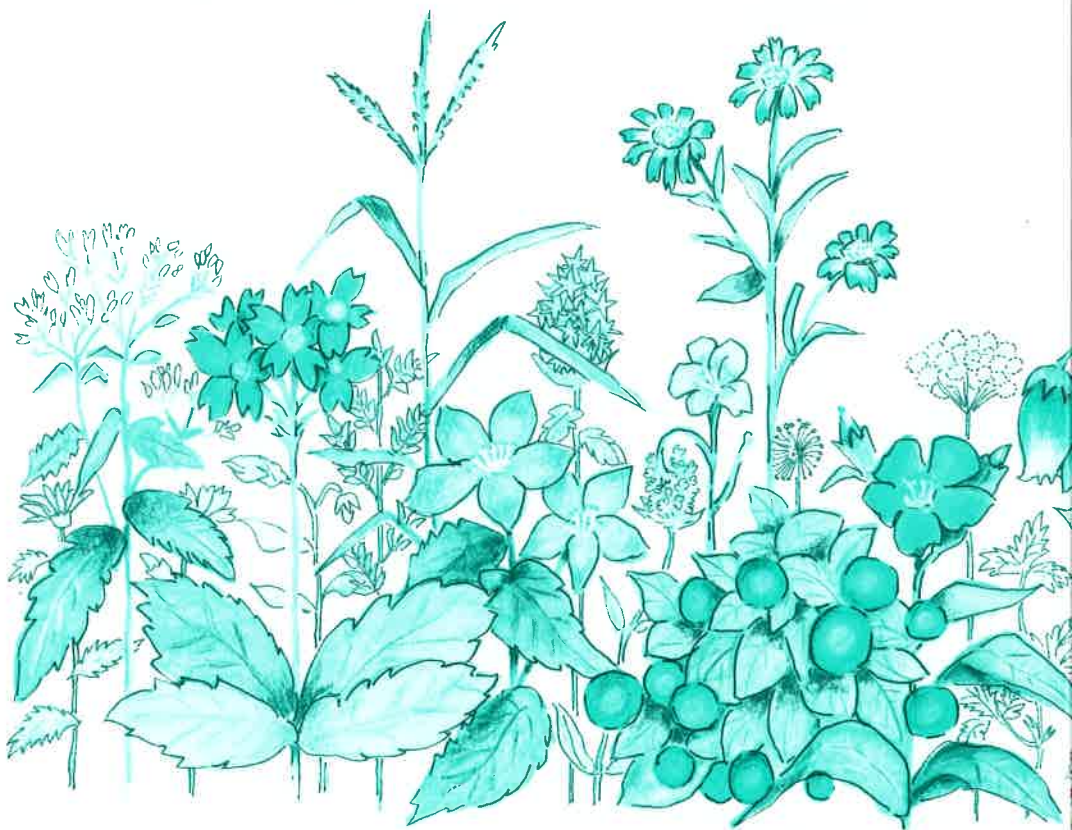
中学校

No.766 平成29年 7

年間特集 学校からの教育改革

特集 道德教育

- 「特別の教科 道德」をどう推進し、定着させるか
- 「特別の教科 道德」に対する教員の意識改革
- 「特別の教科 道德」の評価の在り方





世の中に必要とされる
会社であり続けるために

清川メッキ工業株式会社
代表取締役社長（工学博士）

清川 肇

清川メッキ工業は、昭和三十八年三月二十三日に福井の地で創業しました。この日は両親の結婚した日でもあり、夫婦二人で始めた会社は創業五四年となりました。当社は超ローカル企業で、本社も工場も全て福井市内にあります。海外の取引はありませんし、海外に工場を作るつもりもありません。当社に入れば、転勤の心配はなく、家族が安心して働くことができます。現在の社員約三〇〇人は全て福井県民です。創業当時は大きなものへのめっきが得意でしたが、現在では電子部品や半導体等の小さいものへと移り変わってきており、二年前には「日本で一番大切にしたい会社」に選ばれ、安倍総理大臣が視察に来てくださいました。昔、父に「なぜめっき業を始めたのか？」と質問したことがあります。父は「電話帳で調べたら福井で一番少ない職業がめっきだったから。」と答えました。さらに聞いてみると、父は、農家の次男坊で養子先まで決まっていたそうです。養子先からの要望で大手繊維会社に勤めましたが、薬品タンクに落ちる事故で長期入院しました。そのとき見舞いに来てくれた先輩から、高卒では班長止まりで出世も望めないことを聞き、これからの人生を見つめ直し、養子というルールから外れて独立して会社経営をしよう

うと考えたそうです。めっきに関しては、小学校の授業で硫酸銅浴に乾電池を使った電気めっきを見て、青い液体から赤っぽい銅皮膜が形成される不思議さに魅了されました。先生に頼んでそのめっき液をもらい、自宅のあらゆる金属製品にめっきをして怒られた記憶があるそうです。人は職業選択のときに未経験で見聞したことのない職業は選択しにくいものです。そこで、モノづくりの楽しさを知ってもらい、福井の若い人たちに将来モノづくりに従事してもらえるきっかけになればと思い、当社は一〇年以上前から「めっき教室」という出張講座を行っています。

一 社風とは

会社には各社、社風というものがありませんが、当社は創業者である会長の性格が大きく影響しています。会長は「できないとは言わない」「男は子供を産むこと以外は何でもできる」と常日頃、言っています。四〇年前に電子部品を始めたときも、地元の電子部品メーカーから「チップ部品の電子部品に電極の半田めっきができますか？」といった依頼をうけ、即答で「できます」と回答していました。電話を受けたとき、電子部品の言葉は知っていても実物を見たことはありませんでした。ビジネス誌で「十年で十倍伸

びる業種」に電子部品が入っていることを思い出し即答したのです。福井県にある三一のめっき業者の中で「できます」と即答したのは当社だけだったため、取引が始まり、今に至ります。また会長は「根拠のない自信」の持ち主です。どんなに困難なテーマであっても、できないとは思わないので、できるまで何回でもチャレンジします。そうやって困難なお客様の依頼に応えてきました。「根拠のない自信」は生まれるながらもっているものではなく、何回も困難を打ち破ってきた結果、備わっていくものだと思います。

二 敷かれたレール

私は男三人兄弟の長男として生まれ、七年前に父の跡を継ぎ代表取締役社長となりました。子供の頃から「後継ぎ」と呼ばれ、敷かれたレールに乗った人生で、本音を言うというルールから外れた気持ちはいっばいでした。人前で話すのが苦手だったので、夢は経営者となることではなく、科学者となることでした。地元の福井大学四年生のとき、父は後を継げとは言いませんでしたが、薬品メーカーに就職するように勧められました。私は考える時間がほしかったので大学院に進み、めっきの研究をしました。めっきの研

究は興味深くやりがいがありました。卒業後は自分で関東の半導体会社を探し入社しました。福井から離れて二年後に私は「福井には帰らないから」と宣言しましたが、父は何も言いませんでした。これで敷かれたレールからは降りたわけです。レールから外れたら継ぐ、継がないは自分の意志になります。しかし、一年後に母から、父が病気で弱っていると言われました。自分なりに考えた結果、やはり実家の手伝いをしようと決心し福井に帰ったのですが、帰ってみると、父は病気と言っても糖尿病で、びんびんしていました。しかし、自分の意志で帰って来たからには、逃げることもできませんでした。

三 クレームが人を育てる

実家に帰り、会社に出始めた頃、新製品の電子部品が急激に増え、社員は一〇〇人を超えていました。新工場を建てめつき設備の投資をして、会社がどんどん変化していた時期でした。今思うと、この頃が過去の中で一番お客様からのクレームが多いときでした。製品の最後の工程でめつきがおかしいと、それまでの工程が全て水の泡と化してしまいます。お客様のお叱りもきつくと、通常生産の上にリカバリーの生産、不良品の選別作業、不良対策作業など、仕

事量が膨大に増えていきます。その結果、労働時間も増え、精神的にも追い詰められ収益も落ちていき、社員が次々と辞めていきました。「病気を治すには真の病気の原因を見つけないと治らない」と言いますが、めつきの世界も同じで不良品も真の原因を見つけないと治りません。以前、就職していた半導体会社ではナノテクの評価技術も学んでいたのですが、大学や工業技術センターの高価な測定装置を借り、真の不良の原因を探りました。すると不良の原因はめつきではなく、お客様の素材に原因があることを突き止めることができました。すると立場も逆転し、仕事も順調に廻るようになっていきました。

あの頃、苦勞を共にした社員は、現在、取締役や部課長になっていきます。一方、たくさんの社員が辞めていったのも事実です。社員に会社に居たくないと思わせてしまったのは、会社の責任です。大体、急成長するとそういうことが起こるように思います。その後は急激に仕事や社員を増やしたりしないよう、地味に確実にといった経営を目指しています。

四 会社の存在意義

会社経営は社員のベクトルが皆、同じ方向を向けば大き

な成果を生むことができます。しかし、経営者の方向性が間違っていると、社員を路頭に迷わすことになります。世の中に必要とされない会社は潰れてしまいます。経営者の仕事は社員を幸せにしながら、会社の存在意義を明確にして世の中に必要とされる会社であり続けることです。

清川メッキの存在意義は二つあります。一つは小さいモノへのめつきです。三〇年前に発売された最初のシヨルダー型携帯電話は、三kgありました。大量の資源を使って製造し、沢山の電気を使って充電していましたが、機能は通話だけで使用できる時間も少しかったです。現在の携帯電話は約一〇〇gで三〇分の一まで小さくなっています。通話時間は大幅に伸び、カラー液晶、メールに多様なアプリと機能満載で、世の中に無くてはならないものとなりました。中に使われている部品は超小型化されており、清川メッキはその超小型部品にめつきをしています。部品が小型化されることにより、使われる資源が減り、配線の距離が短くなり電気の消費量が減ります。結果的に我が社は省資源、省エネに貢献しているのです。

二番目は、安全・安心の品質を提供することです。当社でめつきしている電子部品は年間数億個ありますが、不

良は一つたりとも許されません。もし当社の社員の一人がミスをして、自動車部品に突発的故障の可能性が生じると、大きな社会不安を起こします。不良ゼロは世の中に安全・安心をもたらします。

人間一人一人の能力で世の中に貢献することは大変です。会社という器を使い、チームを組めば、一人では決して成し遂げることのできないことで役立つことができます。もう一つ確実に貢献できることは、利益を上げて税金をたくさん納めることです。

五 最後に

激変する世の中で地域や日本が存続し続けるためには、イノベーションを続けなければなりません。イノベーションが、「できるかどうかかわからないものに挑戦してそれを成し遂げる」とするならば、成し遂げるには相当のモチベーションが必要となります。また、人は夢以上のことは達成できません。次の世代を作るのは今の若者です。若者がどれほど夢を描き、諦めない精神を宿すが今後の世の中を決めていきます。今、我々が最優先にすべきことは若者の人材育成だと感じています。